



No.34 2007.12.

土木史フォーラム

Newsletter of Committee on Historical Studies in Civil Engineering
Japan Society of Civil Engineers

目次

フォーラム	産業遺産と比べ、土木遺産はなぜ出遅れているのか？	伊東 孝	1
土木史ニュース	平成 19 年度選奨土木遺産	選奨土木遺産選考委員会	3
文化財ニュース	文化財となった土木関連建造物等一覧	北河 大次郎・阿部 貴弘	4
地域のニュース	使いながら残す、広島県の雁木群	NPO 法人雁木組	5
学会の動き	産業景観シンポジウム報告	岡田 昌彰	6
	第 27 回土木史研究発表会報告	山田 圭二郎	6
	歴史的構造物保全技術連合小委員会の活動状況の報告	五十畑 弘	6
	第 28 回土木史研究発表会の開催と講演用論文及び討議欄の募集	土木史研究委員会	7
	平成 19 年度 土木史研究委員会及び土木史フォーラム小委員会委員名簿		7
土木史関係図書		横松 宗治	8

フォーラム

産業遺産と比べ、土木遺産はなぜ出遅れているのか？

日本大学理工学部社会交通工学科 教授 伊東 孝

1. 産業遺産と土木遺産

産業遺産と土木遺産との違いは、工場や機械、堤防や港湾というように施設の違いもあるが、本来の違いは、「モノ」の違いにあるのではなく、「モノ」の所有と管理および機能の相違にあると思う。堤防や港湾でも、民間で所有・管理し工場生産の中に組み込まれていたら産業遺産であり、役所で所有・管理し公共施設として使われていたら土木遺産となる。

それゆえ橋梁やダムなど、同じ構造物を対象としているのに、なぜ近年、産業遺産がブームなのに対し、土木遺産はブームにはならないのかという主題のような疑問がでてくることになる。

工場や鉱山が廃止されても、廃止された施設を含め土地自体は企業が所有し管理している場合が多い。佐渡金山等の事例は、それまで地域の基幹産業を担っていたのに、廃鉱されると地域自体が成立しないために、あたらしい地域おこしとして産業遺産観光を行ったかもしれないが、近年の産業遺産ブームは、ちがう位相が加わってブームになっている。

背景には日本が世界遺産条約に批准して以来の世界遺産ブームがあることを指摘しておきたい。それまで負のイメージしかなかった「遺産」自体に対する意味合いもプラスのイメージに変わってきた。

2. 「産業観光」

近年の産業遺産ブームは、「産業観光」という言葉に置き換えてもよく、愛知県や北九州市などで際立

っており、最近では、川崎市も「産業観光」に力を入れている。「産業観光」は、日本の近代化を支えた工場や橋、ダムや倉庫などの産業遺産めぐりとともに、現役の工場などもコースに入っている。実際わたしも、「産業観光ツアー」に参加したが、産業・土木遺産だけでなく、現役のものづくりの現場をめぐる「産業観光ツアー」は、生産工程や人びとが生き生きと働いている現場を見られるので、ガラス越しであっても楽しい。

「産業観光」といっても、第二次産業だけでなく、第一次産業の農村や漁村を入れてもよく、第三次産業のサービス産業でもふだんは見られないバックヤードや厨房などを見せてもらいながら、最後に表舞台のレストランで食事をすれば、立派な産業観光となる。したがって今日の産業遺産ブームは、この産業観光の大きな脈絡のなかで産業遺産にも光が当たっていると解釈できる。

3. 土木遺産を面白くするには

それでは「産業観光」のノウ・ハウを、どのようにに取り込み土木遺産を面白くできるのか、である。

「産業観光」は、“見て・知る”だけでも面白いが、ある場合にはものづくりを自ら体験できたり、できたものを食べることができ、多様な展開が可能である。これは、現代の産業だけでなく、伝統産業の「産業観光」にもいえる。歴史的な町並み地区は、伝統産業の体験の場を超えて、寝泊りをふくむ生活

体験の場にもなっていると解釈できる。このような体験の場や状況を、土木遺産でまた現代の土木構造物の現場でどのように展開できるのが課題である。

ここでは、すべてを論じることではできないので、「産業観光」ではなく、産業遺産と土木遺産に限定しながら話を進める。

遺産に限定しても、産業遺産と土木遺産の利活用の展開は、産業遺産の方が多様な展開ができる。まず構造物や施設の違いがある。機会がある度にいつていることだが、土木構造物を箱物系（洞窟系）・骨組み系・塊系・ネットワーク系・可動系に分けて利活用を考えると、わかりやすい。箱物系は、発電所や上水道施設のような建物を意味する。建物はレストランなどいろいろな利用方法が可能で、建築分野でノウ・ハウがいろいろ蓄積されている。工場はもちろん建物。箱物系にはトンネルなどの洞窟系もふくめて考えることができる。これに対してむずかしいのが、橋などの骨組み系やダムなどの塊系である。見て楽しめば、それで終わりというのが多い。基本的には、これらの遺産を一般の人が興味をもてるような形で、単独で成り立たせることは無理なので他の遺産、そして他の観光資産をふくめたネットワークとして結ぶことが大切である。

これに対し産業遺産は、ある敷地をもった施設であれば、まとまったシステムを構成していたので、ストーリーも成り立っていた。

第二の違いとして、前述した主体の相違がある。産業遺産は、人が集まり、観光産業になるとわかれば民間の動きが早い、土木遺産はそうは行かない。一般的に公共施設は無料が原則である。制度的には3セク方式や民間委託もできるが、それは本来の業務を超えているし、そこまで話をまとめるには土木の日常業務でこなすことはできない。余分な仕事をすることになるのだから、熱心な人がいないと話が進まない。かつて橋の保存を進めようとしたことがあったが、電話口で「そんな面倒な話を持ち込むなっ！」とお叱りを受けたことがあった。

それでも近年、熱心な自治体では、選奨土木遺産制度や文化庁の登録遺産制度を生かして、構造物を修復したり、地元へPR活動をおこなっている。もちろん熱心でない自治体もあり、選奨土木遺産委員会でおこなっているフォローアップ調査の途中報告によると、中には選奨されたことすら知らず、銘版が行方不明になっているものもある。

土木遺産の修復事例や利活用事例は、近年増えてきているので、そういう事例を土木史研究発表会で報告してもらうことも大切である。『土木史研究』では、確かに「重点部門」として「土木遺産の保存・活用事例報告」をあげている。しかし委員会ないし

は土木史フォーラムの委員と一緒にあって、もっと積極的に動くことも必要かと思う。たとえば毎年、委員会で推奨保存事例や活用事例を選び、顕彰する意味で、『土木史研究』の招待論文として報告してもらう。ここで発表が、ひとつのステータスになればしめたものである。いかがだろうか。

『土木史研究』も、新しい分野の積極的な構築も必要だし、現在動いていることを紹介し、よりよい形へ展開させていくことも必要である。『土木史フォーラム』もその一翼を担っていると理解している。

4. 住民や市民との結びつきが大切

以上は、我々の仲間内の話だが、外に向けて発信することも大切だ。わたしが土木史研究の委員長をしているとき、日本の土木遺産で世界遺産候補になりうるものをリストアップしようと小委員会の立ち上げを提案したが、話のもっていき方のまずさもあり、うまく行かなかった。しかし今年度、大熊孝先生の下で小委員会が立ち上がった。結果については、広くメディアに紹介することが大切だと思っている。

まだアイデア段階だが、土木遺産の検定制度構想も検討中である。

しかしなんといっても基本は、住民や市民の共感を得ながら、土木遺産を利活用していくことにある。敷地のまとまっている産業遺産とちがいが土木遺産単独で完結したストーリーを組むことはむずかしい。他の遺産とネットワークを組んでおこなう方がよい。

土木遺産を利活用する場合、産業遺産と違って儲かる話は少ないので中々ひとは乗ってこないし、前述したように行政は動かない（動けない？）。また土木遺産に価値のあることがわかっていても、担当部局がちがうと動かないことが多い（土木課はつくるのが本業であり、文化財課は保存することが本業）。基本的には私も土木遺産を愛する技術者は、世論をバックにまちづくりのなかで、土木遺産の利活用を考えていかなければならないと思う。そうすることが土木遺産を理解してもらうことにつながるし、ファンを増やすことにもなる。

住民や市民を相手に、行政の間に立つことは、自然科学や工学の実験と違い、自分の思い通りに行かないし、手間ひまがかかる。しかしこれからの土木屋さんには、住民や市民に対する説明責任（アカウンタビリティ）が、いままで以上に求められることを考えると、住民との接触が下手だった土木屋さんが土木遺産を手がかりに意思疎通を図ることも可能ではないかと思う。

寺山修司の言葉をもじるわけではないが、「外に出よう！」である。しかしこの「外」の意味は、土木の仲良し仲間の世界から「外に出よう！」という意味である。

土木史ニュース

平成 19 年度選奨土木遺産

選奨土木遺産選考委員会幹事長 小野田滋

今年度の土木学会選奨土木遺産は、土木学会選奨土木遺産選考委員会（委員長：伊東孝・日大教授）によって別表のように 23 件が選定された。

今回の選奨土木遺産の目玉は、これまで関東支部のみで行われていた公募制度を全国規模で拡大し、幅広い土木遺産をより多くの方々に選奨していただけるようにした点で、23 件のうち「荒川流域治水・砂防事業」「村山・山口貯水池」「箱

根登山鉄道」「境橋」「七重川砂防堰堤群」「堀江水準標石」の 6 件が公募により選定された。

なお、平成 20 年度の公募要領は、「土木学会誌」の募集欄、土木学会ホームページなどで告知される。昨年に引き続いて皆様からの積極的な応募を期待したい（平成 20 年度の公募推薦の締切は平成 20 年 4 月 30 日 必着）。

NO	対象構造物	授賞理由	支部	所在地	竣工年
1	千歳川の子王製紙水力発電施設群：ちとせがわのおうじせいしりょくはつでんしせつぐん	北海道における水力電力開発黎明期を代表する現役稼働の水力発電施設群。新聞用紙等の国産供給力の質と量の飛躍的向上を支えた。	北海道	北海道 / 千歳市	明治43年～昭和16年
2	札幌市水道記念館(旧藻岩浄水場)：さっぽろしすいどうきねんかん(きゅうもいわじょうすいじょう)	急速濾過、薬品沈殿、機械式調節等の近代設備を導入し、札幌の生活を支えた施設。現在は供用当時の様子を保存し、直接見学できる。	北海道	北海道 / 札幌市	昭和12年
3	藻岩発電所・取水堰：もいわはつでんしょ・しゅすいせき	昭和11年から70年間にわたり、札幌市へ電力と水道原水の供給を行ない、札幌市民の生活を支えている重要な施設。	北海道	北海道 / 札幌市	昭和11年
4	土崎港関連施設：つちざきこうかんれんしせつ - 広井波止場：ひろいはとば - 南防波堤：みなみぼうはい - 雄物川放水路：おものがわほうすいりう	波止場や防波堤による港湾の近代化を図るとともに、洪水対策として放水路を整備し、工事で生じた土砂を用いて工業地帯を整備した。	東北	秋田県 / 秋田市	明治35年 昭和4年～ 昭和10年 昭和13年
5	品井沼干拓関連施設：しないぬまかんたくかんれんしせつ - 明治潜穴：めいじせんけつ - 元禄潜穴：げんろくせんけつ - 吉田川サイフォン：よしだがわさいふぁん - 鳴瀬川吉田川背割堤：なるせがわよしだがわせわりてい	元禄から明治・大正・昭和の時代まで約300年にわたり、一連の品井沼干拓事業に対する地元の汗と情熱を支えた一大土木施設群。	東北	宮城県 / 松島町 東松島市	明治43年 元禄11年 昭和8年 昭和15年
6	荒川流域治水・砂防事業：あらかわりゅういきちすい・さぼうじぎょう - 砂防堰堤群：さぼうえんていぐん - 地藏原堰堤：じざうはらえんてい - 川上第一堰堤：かわかみだいいちえんてい - 床固工群：とこがためこうぐん - 水防林・霞堤群：すいぼうりん・かすみていぐん	霞堤と水防林による近世からの地先治水と大正・昭和における砂防堰堤群等の直轄事業とが融合した治水砂防システム。	東北	福島県 / 福島市	大正14年～ 昭和32年 大正14年(第1次) 昭和21年 昭和26年～ 昭和31年 概ね近世以降
7	清水峠越新道：しみずとうげごえしんどう	急峻な谷川連峰の地形と有数の豪雪地帯という厳しい自然環境の中で、一世紀以上の歳月に耐えた往時の職人技術は、土木遺産に相応しい。	関東	群馬県 / 利根郡みなかみ町	明治18年
8	親不知旧道：おやしらずきゅうどう	先人たちが急峻な地形と複雑な地質に挑み、北陸地方の産業、経済の発展に貢献したことを後世へ伝える貴重な土木遺産である。	関東	新潟県 / 糸魚川市	明治15年～ 明治16年
9	村山・山口貯水池：むらやま・やまぐちちよすいち	水道アースダムとしては、3基いずれも当時最大規模。管理橋の吊橋は珍しく、近代では現存唯一。親水景観として優れている。	関東	東京都 / 東大和市 埼玉県 / 埼玉市 所沢市	村山上貯水池： 大正13年 村山下貯水池： 昭和2年 山口貯水池： 昭和9年
10	箱根登山鉄道：はこねとざんとてつどう	本格的な登山鉄道で、粘着式鉄道としては我が国で最も古い勾配であり、世界的にも珍しいもので、既に88年の歴史を誇っている。	関東	神奈川県 / 小田原市 箱根町	大正8年
11	境橋：さかいばし	全国に数例しかないバルコニー付きRC開腹アーチ橋で希少性に富む。景勝地に橋梁が融合し新たな地域の景観美を創出している。	関東	栃木県 / 那須烏山市	昭和12年
12	七重川砂防堰堤群：ななえかわさぼうえんていぐん	近接・連続した堰堤から成る流路工で、大正・昭和初期当時の砂防工法を遺す。	関東	埼玉県 / ときがわ町	大正6年～ 昭和25年
13	堀江水準標石：ほりえすいじゅんひょうせき	オランダ技師リンドが明治5年に設置した近代日本の最初の水準測量の標石のひとつ。Y.P.(江戸川工事用基準面)の原点。	関東	千葉県 / 浦安市	明治5年
14	明治用水旧頭首工：めいじようすいきゅうとうしゅこう	農業用水史上初期の横断堰堤で、服部長七考案の人造石による大規模な堰堤の現存する唯一の例と云われている。	中部	愛知県 / 豊田市	明治42年
15	岩井橋：いわいはし	現存する鋼アーチ桁橋では、日本で2番目の古さを誇っており、側面にはアングル材を巧みに曲線加工した飾り板が施されている。	中部	愛知県 / 名古屋市	大正12年

NO	対象構造物	授賞理由	支部	所在地	竣工年
16	王子橋:おうじばし	田邊朔郎設計の石造アーチ橋で、輪石と壁石が夫婦天端で一体化した非常に珍しい構造形式をもつ道路橋(現在は人道橋)である。	関西	京都府 / 亀岡市	明治17年
17	毛馬閘門・洗堰群:けまこうもん・あらいぜきぐん	明治時代の淀川改修の主要施設で、大阪市内の洪水防御、ならびに淀川本流と旧淀川間の舟運の確保に資した施設群である。	関西	大阪府 / 大阪市	毛馬第一閘門: 明治40年 毛馬第二閘門: 大正7年 毛馬洗堰: 明治43年
18	(旧)江尾発電所:(きゅう)えびはつでんしょ	現存する数少ない石造発電所で、装飾的な外観を留めている。	中国	鳥取県 / 日野郡江府町	大正8年
19	京橋川の雁木群:きょうばしがわのがんぎぐん	水の都“広島”を象徴するわが国最大の雁木群で、歴史的な水辺空間を演出している。	中国	広島県 / 広島市	明治後期～大正期(推測)
20	土釜橋:どがまばし	紅葉と滝が美しい渓谷に架かる鋼アーチ橋である。井桁に組まれた鉛直材の頂部がアーチ状の縦桁で連結された点に特徴がある。	四国	徳島県 / 美馬郡つるぎ町	昭和5年
21	龍頭橋:りゅうずばし	定説(昭和10年)を覆す、明治45年竣工の日本最古の石造沈み橋。下流にあった明治9年築造の永世橋は2003年に流失。	西部	大分県 / 杵築市	明治45年
22	本河内高部堰堤:ほんごうちこうぶえんてい	吉村長策が設計した日本初の水道専用ダムである。新ダム建設において、歴史的な土木施設を原位置で保全する努力を評価した。	西部	長崎県 / 長崎市	明治24年(大正12年嵩上)
23	七窪水源地:ななくぼすいげんち	昭和初期までに5つの水源地と接合枋、上之原配水池への導水トンネルが完成。すべてが重厚な石造・石張構造物となっている。	西部	鹿児島県 / 鹿児島市	第1期:大正8年 第2期:昭和3年

文化財となった土木関連建造物等一覧

【重要文化財】(平成 19 年 10 月答申分)

所在地	名称	建設年代	特徴等
東京都 荒川区	旧三河島污水処分場唧筒場施設	大正 11 年	東京市区改正事業の一環として、東京市技師米元晋一を中心として建設。わが国初の近代下水処理場である旧三河島污水処分場の代表的遺構であり、阻水扉室、沈砂室、濾格室、唧筒室などの一連の構造物が旧態を保持しながら残る。
鹿児島県 鹿児島市	鹿児島旧港施設	弘化嘉永年間、他	築造が江戸末期に遡る沖防波堤である新波止、技術の時代的特色をよく示す一丁台場及び遮断防波堤よりなる。南九州における交通と海防の拠点として近世から近代にかけて整えられた鹿児島港の代表的遺構。

【登録有形文化財】(平成 19 年 9 月答申分)

所在地	名称	建設年代	特徴等
愛知県 豊川市	旧豊川電話装荷線輪用櫓	昭和初期	装荷線輪を設置していた鉄筋コンクリート造の櫓。最初期の長距離市外電話施設。
鳥取県 若桜町	若桜橋	昭和 9 年	千代川水系八東川に架かる旧国道施設。鉄筋コンクリート造 3 連アーチ橋。時局匡救事業の一環として建設された近代橋梁。
長崎県 長崎市	長崎大学(旧長崎高等商業学校)拱橋	明治 36 年	大学構内に架かる石造単アーチ橋。表面を平滑に仕上げた切石で欠円アーチをつくり、縦断面線形を直線状とするなど近代的外観を呈する。

使いながら残す、広島県の雁木群

NPO 法人雁木組 氏原睦子

雁木と雁木タクシー

広島市の市街地は、太田川と支流の6本の川が形成するデルタ地帯に広がります。川には約400ヶ所の雁木があり、人と川の身近な関係を象徴しています。雁木とは階段状の護岸をいい、昭和30年代まで木材などの生活物資の荷下ろしの場として使われていました。1808年に描かれた「江山一覽図」には、護岸のいたるところに雁木と舟が描かれ、舟運で栄えた広島のかつての暮らしぶりをうかがい知ることができます。私たちは、この雁木を再び水上交通の船着場として活用する川の水上タクシー「雁木タクシー」の運営を2004年に開始し、これまでに約13,000人のお客さまに川から広島を楽しんでいただいております。

雁木の歴史性調査

雁木組では川のある街に住まうことをテーマに、様々な活動をしています。そのひとつが、雁木の歴史的価値を確認し保存につなげるプロジェクトです。

6本の河川のうち本川、天満川、元安川の護岸の多くは河川改修が行われ、歴史性の高い護岸および雁木は一部にその姿を残すのみとなりましたが、近年の高潮対策事業が施されていない京橋川右岸上・中流域（工兵橋から稲荷橋の約2.6km）には見ごたえのある護岸および雁木が連続しています。中でも栄橋から京橋にかけては裏木戸跡や美しい切り込み剥ぎの護岸などが残り、まず私たちはこの区間について年代の特定と保存に値する文化財的価値を見出すための現状調査を行いました。

着眼したのは、雁木およびその周辺の護岸の石積みの特徴（練積み・空積み、加工の程度、積み方など）です。結果、護岸は区間ごと、おそらくかつての屋敷単位で多様な形式であることがわかり、それらをグループ化して相対的な年代区分を確定するに



河川改修工事後の楠木大雁木（本川）と雁木タクシー

いたりしました。

調査協力：三浦正幸氏（広島大学教授）

調査報告：川後のぞみ氏（広島大学/NPO 法人雁木組）

選奨土木遺産選定の意義

広島県の雁木について、これまで内外に知られることはあまりありませんでした。雁木タクシーが船着場とし再活用をはじめたのをきっかけとして、同時にこの調査が裏づけとなって平成19年度土木学会の「選奨土木遺産」に選定されるにいたりしました。

私たちは引き続き現地調査の範囲を拡大するとともに、今後は地域の人たちからの聞き取り調査、文献調査のほか、地元の石工さんと一緒に崩れた護岸や雁木を修復するシビクトラストを予定しています。

都市の中で奇跡的に残り、いまでも現役の護岸として活躍する雁木群。今後も本来の用途である「船着場」として、活用しながら地域の人たちと一緒に大切にしていきたいと考えています。



裏木戸跡の残る雁木。
（写真：土居郁夫）



京橋川の護岸と雁木。精度の高い切込剥ぎは当時の石工の技術のうかがわせる

（連絡先tel.082-230-5537

HP：<http://www.gangitaxi.etowns.net/>）

「産業景観シンポジウム」報告

近畿大学 岡田 昌彰

産業景観のもつ現代的意義の探求を目的とするシンポジウム(主催 土木学会土木史研究委員会、景観・デザイン委員会)が9月10日(月)、土木学会講堂で開かれ、計77名の参加者を得て有益な討論が行われた。

アンドレギエルム・フランス国立工芸院教授からは、パリ郊外パンタン市で利活用計画が進行中の旧製粉工場の形成する産業景観の地域社会史、デザイン史、及び技術史的意義について基調講演を頂いた。話題提供者の筆者は、意味と表層という2つの観点からわが国の産業景観(テクノスケープ)の歴史と価値体系について概観した。小野良平氏(東京大学)からは、近代以前からの資源採取によって改変され続けた自然景観の系譜と現況を史実として後世に伝達する手法について有益な示唆があった。井上典子氏(文化庁)には、文化的景観保護制度の概要とともに、場所性・象

徴性・表象性など諸要素の総体としての産業遺産の位置づけについて報告頂き、最後に大野繁氏(写真家)からは、数十点に及ぶ秀逸な作品のスライドをもとに被写体としての産業施設へのアプローチ法について詳説頂いた。

中村良夫・東京工業大学名誉教授は、19世紀フランスの建築修復家ヴィオレ・ル・デュクの手法が産業景観に適用されていることの重要性を指摘され、その背景にあるロマンティシズムの影響など新しい観点を提示された。さらに質疑では歴史のトレサビリティ(追跡可能性) 関連産業の総合的アピールの可能性など多岐に渡る議論が展開された。

産業景観の有効な活かし方や価値の置きどころを考究していく上でもこのような学際的・国際的議論の意義は大きい。今後も継続的な議論展開が望まれるところである。

第27回土木史研究発表会を終えて

(株)オリエンタルコンサルタンツ 山田 圭二郎

去る7月7日(土)・8日(日)の両日、近畿大学において、第27回土木史研究発表会が開催された。

これに先立つ6日夜には前夜祭として、大阪・中ノ島周辺の堀を船で巡り、新旧橋梁群を船上から見学するリバークルーズが開催され、好評であった。発表会は3つのフロア、テーマごとの15セッションで計51編の発表があり、活発な意見交換が行われた。また、2日目の最初のセッションでは、急遽空きフロアを使い、岡山大学・馬場俊介先生から、世界遺産登録を目指す「閑谷学校、岡山後楽園と、岡山の農業・

土木遺産群」について興味深い話題提供があった。

一方、懇親会の席では年輩の方々から「若い人たちの参加が少ないなあ」との少し寂しい声もちらと聞かれた。実際ここ数年、発表会での論文発表数、査読付き論文集への投稿・掲載数は減少傾向にある。

土木史フォーラムでは、一般の方々や土木史の初学者の方々を含めた幅広い参加と交流を図るため、Web版での記事掲載を含め、土木遺産に関わる取り組みを実践している地域の方々と積極的に取り上げ、紹介していきたいと考えている。

歴史的構造物保全技術連合小委員会の活動状況の報告

日本大学 五十畑 弘

歴史的構造物保全技術連合小委員会は9月13日、全国大会(広島大学)において「歴史的構造物保全の計画と技術」と題する共通セッションを開催した。

構造物の点検・診断手法、補修・補強技術、地域資源としての活用等について7編の話題提供が行われ、法制度、事業運営、技術開発、管理・活用の手法と効果等、歴史的構造物保全のための実務的課題と今後の取り組みの方向性に関して幅広い意見交換、議論が行われた。

同小委員会はこれまでも、平成18年度全国大会で「土木遺産の維持管理に係る技術的課題」と題する研究討論会を、また平成19年度土木計画学春大会

では「土木遺産の保全に関する土木計画学のアプローチ」と題する企画セッションを実施する等、対外的な活動も行っている。

今後、土木学会誌上で2回程度のミニ特集を行う(特集内容は、保全理念の整理・分析、保全事例の収集・分析、ケーススタディー、を予定)。また、啓蒙活動の一環として、(社)日本土木工業協会の機関誌「建設業界」で、平成20年1月より「土木遺産の新時代」と題する連載を予定しているほか、研究成果を個々の専門分野のより実務的な研究に結びつけるべくセミナー開催を予定している。最終成果は図書として発行する予定である。

学会の動き

「第28回土木史研究発表会」の開催と講演用論文および討議欄の募集

土木史研究委員会

土木史研究委員会(委員長:小西 純一・信州大学教授)では、第28回土木史研究発表会の開催(2008年7月、九州大学会場)にあたり、講演用論文を募集いたします。皆様のご投稿をお待ち申し上げます。

第28回発表会より発表用論文の提出方法が、版下原稿郵送から電子投稿に変更となり、従来の講演申込が無くなり、発表論文原稿の投稿が申込みも兼ねることになります。また、投稿の締め切りは4月上旬を予定します。

電子投稿の方法の詳細などは土木史研究委員会ホームページ <http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/index.htm> にてご案内申し上げます。また、ご研究の環境によって電子投稿が困難な場合には、事務局担当者までどうぞ遠慮なくお問い合わせください。

なお過去の土木史研究発表会で未発表の論文について「土木史研究(論文集)Vol.28」(2009年6月刊予定)に掲載をご希望される場合は、まず「講演用論文」として第28回土木史研究発表会で発表する必要があります。ご注意ください。

土木史を専門に研究されている方に限らず、計画、景観、構造、水理、土質、材料、施工など各分野を専門にご研究されている皆さまも、歴史的なテーマに関連する研究や実践にお取り組みになられている、あるいは、歴史的な着想による調査、研究にチャレンジされておりましたら、この機会に是非ともご参加ください。

また、過去の「土木史研究」に掲載された論文についての討議欄も従来通り設置していますので、あわせて電子投稿システムをご利用下さい。

1. 主 催：土木学会(担当：土木史研究委員会)
2. 期 日：2008年7月5日(土)～6日(日)
3. 会 場：九州大学西新プラザ(福岡市早良区西新)
4. 発表用論文、討議の申し込み、投稿方法：電子投稿(詳細土木史研究委員会 HP 参照)
5. 問合せ先：土木学会土木史研究編集小委員会 (担当職員：橋本剛志)
(〒160-0004 東京都新宿区四谷一丁目外濠公園内、
Tel.03-3355-3559 / FAX.03-5379-0125、E-Mail : hashimoto@jsce.or.jp)

平成19年度 土木史研究委員会及び土木史フォーラム小委員会の委員構成

土木史研究委員会・同 土木史フォーラム小委員会

【土木史研究委員会】

- 委員長 小西 純一(信州大学)
副委員長 五十畑 弘(日本大学)
副委員長 松村 博
幹事長 天野 光一(日本大学)
委 員 岩屋 隆夫(東京都土木技術センター)、小野田 滋((財)鉄道総合技術研究所)
川崎 秀明(国土交通省国土技術政策総合研究所)、白井 芳樹((株)オオバ)
藤井 三樹夫((株)水環境研究所)
幹 事 阿部 貴弘(パシフィックコンサルタンツ(株))、伊納 浩((株)地域開発研究所)
笠 博義((株)間組)、北河 大次郎(文化庁)、今 尚之(北海道教育大学)
馬場先 恵子(金沢学院大学)、山田 圭二郎((株)オリエンタルコンサルタンツ)

【土木史フォーラム小委員会】

- 小委員長 藤井 三樹夫((株)水環境研究所)
幹事長 山田 圭二郎((株)オリエンタルコンサルタンツ)
事務局 伊納 浩((株)地域開発研究所)
常任委員 阿部 貴弘(パシフィックコンサルタンツ(株))、神田 恭太郎(川鉄橋梁鉄構(株))
田中 尚人(熊本大学)、永村 景子((株)文化財保存計画協会)
原口 征人((社)北海道開発技術センター)、日野 智(秋田工業高等専門学校)
榊山 清人((財)全国建設研修センター)、横松 宗治(APECLAND(HONGKONG))

土木史関連図書

書名	著者・編者	発行所・発行日	定価(税込)
現代日本土木史[第2版]	高橋裕著	彰国社・2007年7月	¥3,000-
1990年に出版された土木史のテキストの再版。			
材料力学史	スティーヴン・ティモシェンコ著、最上武雄監訳、川口昌宏訳	鹿島出版会・2007年6月	¥3,990-
1974年に出版された材料力学史のテキストの再版。			
鎮守の森	上田篤編著	鹿島出版会・2007年5月	¥2,835-
わが国の文化の原点としての鎮守の森を見つめる。			
みんなでつくる美しい道 路地裏から生態林まで	鈴木忠義編著・道路緑化保全協会編	技報堂出版・2007年06月	¥1,890-
人と道と環境、美しい道をつくる、活かす。			
天橋立物語	岩垣雄一著	技報堂出版・2007年07月	¥3,150-
天橋立の歴史と丹後地方の古代・中世を辿る。			
図説 日本の近代化遺産	北河大次郎・後藤治編著、小野吉彦写真	河出書房新社・2007年9月	¥1,890-
国の重要文化財に指定された近代化遺産を網羅。個々の構造物のデザイン的な価値とともに、複数の構造物により構成されるシステム自体の価値にも目を向け、周辺の関連施設も含めて紹介する。貴重な写真や資料も充実。			
東京人 2007年8月号「特集 東京の橋百選」	-	都市出版・2007年7月	¥900-
「東京人」初めての橋の特集！水の都・東京を彩る数ある橋の中から貴重な橋・百橋を選定、その魅力を多角的に紹介する。			
なるほど知図帳 世界に誇る日本の建造物—現代日本を創ったビッグプロジェクト—	窪田陽一監修、西山芳一写真	昭文社・2007年10月	¥2,100-
地図・ガイドブックを専門とする出版社が放つ、橋・ダム・トンネル等の巨大建造物+土木遺産(500選)をテーマにした画期的な地図帳！巨大建造物を解剖する迫力あるグラフィック、土木写真家撮影の美しい写真、専門家による詳しい解説等、充実の一冊。			
NHK 知るを楽しむこの人この世界「ニッポン近代化遺産 明治・大正・昭和知られざる世界」	清水慶一著	日本放送出版協会・2007年10月	¥683-
2007年10,11月にNHK教育テレビで放送された上記番組のテキストブック。建設の背後に隠された物語を読み解きながら、近代化遺産とともに、確かにそこに存在した、「人の営みや生業の跡」を辿る。			
都市の緑はどうあるべきか - 東京緑地計画の考察から -	真田純子著	技報堂出版・2007年2月	¥3,360-
「都市の緑はどうあるべきか？」タイトル通り、まさにこの一点のために資料を丹念に紐解き、「東京緑地計画」の計画理念・思想に迫る。その先に、概念化した「自然」を乗り越え、生活に密着し、生の実感の伴った「文化としての緑」を見つめる著者の眼差しがある。			

(APECLAND(HONGKONG) 横松宗治)

編集後記

今回から私が事務局を担当することになりました。少ない紙面で盛りだくさんの情報をお伝えする苦勞を味わっています。ここでは紹介しきれなかった情報については、土木史フォーラムのHPをご覧ください。

特に、新しい情報も逐次HPでお知らせしています。アドレスは右記にあります。なお、検索サイト(YAHOOなど)でも『土木史フォーラム』で探し出せますので是非ご覧ください。(伊納)

土木史フォーラム No.34

監 修：土木学会土木史研究委員会
 発 行：土木史フォーラム小委員会
 代表者 藤井 三樹夫 (株)水環境研究所
 事務局：伊納 浩 (株)地域開発研究所
 TEL.03-3831-2844 FAX.03-3831-2620
 Email : inou@rdco.co.jp
<http://www.jsce.or.jp/committee/hsce/forum/>
 印 刷：(株)青孔社

CONTENTS

-FORUM		
・ Why does not Civil engineering heritage start a boom whereas Industrial heritage is a boom?	ITO Takashi	1
-NEWS		
・ 2007 Admiration of Civil Engineering heritages by JSCE	(JSCE)	3
-Civil Engineering Works on Latest Heritage Registration List	KITAGAWA Daijiro and ABE Takahiro	4
-LOCAL NEWS		
・ A number of the Gangi in Hiroshima are used and preserved	UJIHARA Mutsuko	5
-REPORT FROM CHSCE(Committee on Historical Studies in Civil Engineering)		
・ Report on the Symposium of Technoscape	OKADA Masaaki	6
・ Report on the 27th Annual Meeting of CHSCE	YAMADA Keijirou	6
・ Report on the activities of CHEW(Committee for Historical Engineering Works)	ISOHATA Hiroshi	6
・ Call for papers of the 28th Annual Meeting of CHSCE	(CHSCE)	7
-BOOK GUIDE	YOKOMATSU Muneharu	8